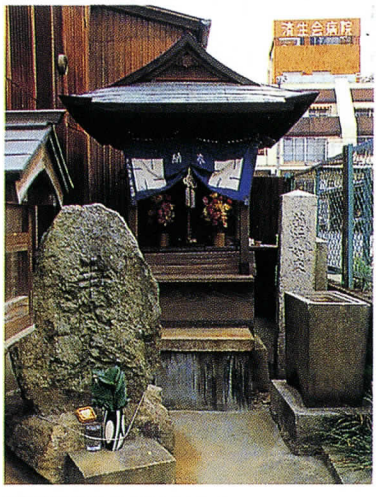
二日市(4)——湯　町

湯町(立正佼成会前)に建つ万葉歌碑（書家 古賀井卿氏の筆）



薬師如来をまつるほこら

「湯の原に　鳴く葦鶴は　吾がごとく
　　妹に恋ふれや　時わかず鳴く」

日本最古の和歌集『万葉集』巻第六に収められている大伴旅人の歌です。この一首は、大宰帥（大宰府の長官）として九州に下った旅人が、この地で不幸にも妻大伴郎女を急病で亡くし、その深い悲しみを湯の原に鳴く鶴の姿にたくして詠んだもので、二日市温泉（次田温泉、武蔵温泉）がその舞台であるといわれています。神亀5年(728)から天平2年(730)の旅人在任中には、すでに温泉が噴き出していたことが推定され、今も「湯の原」という小字が残っています。

「世の中は　空しきものと知る時し
　　いよいよますます　悲しかりけり」

仏教思想にふれた歌人旅人の心情があふれています。

平安時代末期の『梁塵秘抄』には「次田の御湯の次第は、一官二丁三安楽寺、四には四王寺五侍、六膳夫、七九八丈、九兼丈、十には国分の武蔵寺、夜は過去の諸衆生…」と大宰府官人、侍従、僧などの入浴の順番が記載されています。さらに、かぐや姫で有名な『竹取物語』には「筑紫の国に湯浴みにまからむ」とあり、“筑紫の湯”が次田温泉にあたるのではないかとする説もあります。

承徳元年(1097)正月6日、詩歌で有名な大宰権帥の源経信が死去した際、子の俊頼が次田温泉を訪れています。父子で、平安時代後期に多くの和歌集を編纂しました。

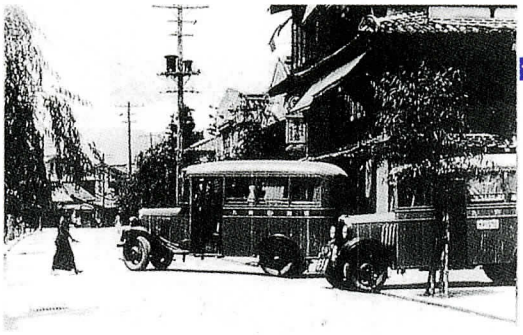
戦国時代、湯町は度重なる戦乱に巻き込まれたのか、ほとんど資料が残っていません。

また、武蔵寺縁起によると、同寺創建にゆかりのある藤原虎麿が、愛娘瑠璃子姫の病気を、この温泉で治したとされています。

武蔵寺縁起絵図は近世になって製作されたようですが、「瑠璃子入湯」「湯町繁盛」の光景が色彩鮮やかに描かれています。

江戸時代になると黒田藩が二日市を日田街道の宿場に決め、御茶屋（本陣）を置いて隣接の温泉には「御前湯」を設けました。藩主が入湯したことから、その名がついたようで、最も古い記録では元禄2年(1689)に黒田綱政が国中の宿駅を巡覧した際に入浴しています。

同藩の儒者・貝原益軒（1630～1714）は著書『筑前国続風土記』に「温泉四所にあり。癬瘡(できもの)をよくいやす功ありとて、遠近より来り浴する者多し。」と記しています。

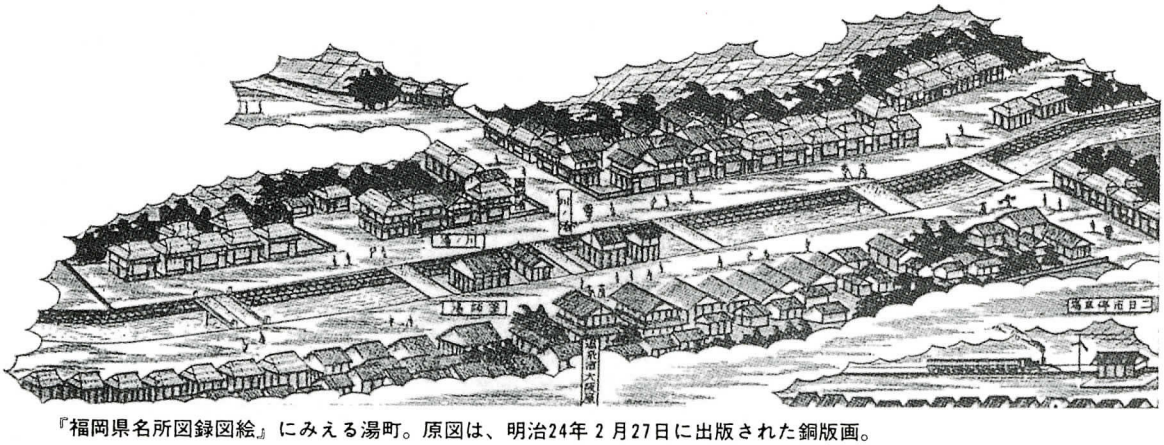


▲昭和14年（1939）ごろの湯町。
▶川の上を道路にした後の湯町。
正面の建物は、往年のなごりをとどめる「川湯」。

ところが、この湯町はたびたび火災に見舞われました。「岩松日記略」（福岡県史資料）によると、嘉永五年(1852) 7月1日夕、大雨と雷が激しく、御前湯に落雷して全焼、隣家まで焼失しました。その年は旱魃（かんばつ）のため、天拝山頂で雨乞をしたあげくの悲劇でした。慶應4年(1868)春には、田代屋から出火して御前湯も類焼し、御成の間と助湯までことごとく焼けたようです。被害は民家を含め42軒のほか納屋などにも及びました。明治10年5月にも木屋から出火して角屋、対馬屋、肥前屋など24～5軒が焼失し、この時も御前湯が焼けました。江戸時代から明治初期までの記録に残る主な大火です。この時代は武蔵温泉と呼ばれたころで、同22年の九州鉄道（現JR）の開業をきっかけに温泉観光地として変貌しました。十数軒の旅館が競って浴場を開いたほか、区有財産の御前湯、薬師湯、川湯を民間の経営者にまかせて、近代化を進めました。このうち、川湯は昭和7年の豪雨で崩壊したため、その上を街路として舗装し現在に至っています。御前湯は筑紫野市福祉センターに建て替えられ、薬師湯は、その跡に薬師如来像をまつるだけになっています。昭和40年代の湯町には、旅館が20数軒ありました。

〈参考〉太宰府天満宮
『大宰府・太宰府天満宮史料』
松尾光淑『武蔵温泉誌』
高木市之助他編
『万葉集』日本古典文学大系
二日市町役場『二日市小史』

（村里徳夫）



『福岡県名所図録図絵』にみえる湯町。原図は、明治24年2月27日に出版された銅版画。

1995. 3.31. 発行
1997. 8. 1. 第2刷 発行
2000. 3. 1. 第3刷 発行
2014. 9. 1. 第4刷 発行